

発達障害様の困難のある聴覚障害児への気付きシート作成の試み

—全国の聴覚障害特別支援学校に対する聞き取り調査を通して—

○天野貴博

濱田豊彦

(東京都立葛飾ろう学校)

(東京学芸大学特別支援科学講座)

KEY WORDS: 聴覚障害 発達障害 困難の要因の鑑別

【目的】天野・濱田(2017)が実施した全国の聴覚障害特別支援学校を対象としたアンケートによる実態調査では、88%の学校が発達障害を重要な課題として認識していることが明らかになった。しかし、発達障害様の困難のある聴覚障害児の困難の要因の鑑別については未だに統一的な方法が確立していない。そこで、本研究では発達障害様の困難のある聴覚障害児が抱える困難の要因を学校現場ではどのように鑑別しているかを把握し、発達障害様の困難のある聴覚障害児への気付きシート試案の作成を目的とする。

【方法】全国の聴覚障害特別支援学校の教員に対して、半構造化面接による聞き取り調査を実施した。聴覚障害児の教育に5年以上携わり、現在または過去に発達障害様の困難のある聴覚障害児を指導した経験をもつ学校から推薦された教員を調査対象とした。面接は筆者と1対1、あるいは1対2で行った。所要時間は30分～40分程度であった。調査期間は2016年8月～10月とした。質問項目は表1の通りである。

表1. 聞き取り調査質問項目

(1)	発達障害様の困難のある聴覚障害児の困難の特徴について
(2)	聴覚障害以外に何らかの課題があると気付いた場面、きっかけ
(3)	困難が発達障害に起因していると強く感じた場面、きっかけ

【結果及び考察】実態調査(天野・濱田, 2017)の結果を元に、学校として積極的に取り組みを行っている14校の聴覚障害特別支援学校(北海道:1校、東北:1校、関東:6校、近畿:1校、四国:2校、九州:3校)に対して聞き取り調査を実施し、26名の教員から40名の発達障害様の困難のある聴覚障害児(以下、ケース)の情報を収集した。40名のケースを4つの群に分類した結果「LD傾向群:6名」、「ADHD傾向群:13名」、「ASD傾向群:15名」、「グレー群:6名」となった。また、それぞれの群の中でも困難の特性は様々であった。

以下に、学校現場における発達障害様の困難のある聴覚障害児が抱える要因の鑑別の観点についてまとめた。

1)手話の使用の困難さや不自然さに着目した際に、疑いをもつようになったというケース(LD傾向群:1名、ADHD傾向群:2名、ASD傾向群:1名、グレー群:2名)

空間認識をうまく捉えた手話ができておらず手話が特異的であるケース、手話だけであればスムーズに表出できるが、手話と口話を同時にやるとごちなさが生じるケース、相手に分かりやすく伝える、文章にして伝えるということ意識するのが難しく、読み取りにくい手話表現になっているというケースと様々であった。手話をコミュニケーション手段として用いている聴覚障害特別支援学校がほとんどであるという現状がある中で、手話の使用の難しさや不自然さに着目して評価を行うということが、発達障害様の困難のある聴覚障害児の鑑別の手段の一つになりうるのではないかと考える。

2)視線の動きが不自然さや目が合わないと感じた時に、疑いをもつようになったケース(ADHD傾向群:3名、ASD傾向群:1名)

ASD傾向の困難をもつ聴覚障害児の場合は目を合わせられないというところで疑いをもった、ADHD傾向の困難をもつ聴覚障害児の場合は衝動性や多動性といった特徴からくる視線の動きで疑いをもったとのことであった。一斉指導の中で児童・生徒一人一人の視線が話者に注目しているかどうかを見

た時に、一人だけ視線が違うところに向いている場合は、聴覚障害以外の何らかの障害がある可能性が高いと判断することができるということが考えられる。聴覚障害児と関わる中で視線の動きに注目することや視線が合うかどうかを見ることは、発達障害様の困難のある聴覚障害児の鑑別の手段の一つになりうるかと考察する。

3)発達障害の特徴と類似しているところが見られ、同じ学年の子供と比較してもその特徴が顕著に現れていると感じたことが気付きのきっかけになったというケース(LD傾向群:3名、ADHD傾向群:10名、ASD傾向群:11名)

近年、聴覚障害特別支援学校の中でも発達障害に関する認識が広がっている。このことにより、教員にも発達障害の特徴についての知識が広まり、その特徴と類似した行動特徴があるときに発達障害を疑うことが増えたと考察した。

以上の3つの観点から示されたことから、聴覚障害特別支援学校の教員が誰もが発達障害様の困難のある聴覚障害児の困難の鑑別ができるようになっていくためには、まず、発達障害と聴覚障害双方の障害の特徴や行動特徴を理解することが必要になってくる。そのためにも、発達障害に関する校内研修の充実や発達障害の専門性のある人材の活用による発達障害の専門性を育てていくことを目的とした体制作りが今後求められてくるのではないかと考える。

また、本研究の結果を踏まえて、「発達障害様の困難のある聴覚障害児への気付きシート試案」を作成した(表2)。気付きシートには、「手話の使用」、「視線の動き」、「発達障害の特徴と類似している(LD、ADHD、ASD)」の3つの項目を設け、各項目に3つのチェック項目、合計15項目を設定した。あくまでも、このチェックシートは発達障害様の困難のある聴覚障害児の困難の鑑別を行う際の前段階に、ヒントとなるような視点を羅列したものである。

表2. 発達障害様の困難のある聴覚障害児への気付きシート試案

		項目	✓
手話の使用		手話表現が適切にできていない(単語、位置関係)	
		相手に伝えるということを意識した手話表現ができていない	
		手話が読み取りにくい	
視線の動き		他の子供と同じところに注目していない	
		1対1で話している時に視線が合わない	
		やりとりをしている途中で視線の動きが生じる	
発達障害の特徴と類似している	LD	書くということに困難がある	
		文章を読むということに困難がある	
		日本語の獲得に難しさがある	
	ADHD	落ち着きがない、常に身体を動かしている	
		突発的に行動することがある	
		集中、注意の持続が難しい	
	ASD	特定のことに對するこだわりが強い	
		対人関係に難しさがある	
		状況の理解、他者の理解が難しい	

今後、発達障害様の困難のある聴覚障害児の困難の要因の鑑別の仕方が明らかにされるようになってくると、幼稚園から様々な機関との連携をとってきている聴覚障害特別支援学校では、早期からの発見及び適切な教育介入の実現につながっていくと期待される。

【文献】天野貴博・濱田豊彦(2017) 発達障害様の困難のある児童・生徒への聴覚障害特別支援学校の取り組みに関する一考察. 東京学芸大学紀要. 68(2), 227-234.

本研究は科学研究費基盤研究(B)16H03809の助成を受けた。

(AMANO Takahiro, HAMADA Toyohiko)